

十和田市立 新渡戸記念館だより

▶石川浩さん所蔵の写真アルバムから、三本木新渡戸邸での記念写真。中央が新渡戸万里夫人、夫人の向かって左の女の子が前館長・新渡戸稲子、その左にアンナ・C・ハーツホーン女史、新渡戸わか(新渡戸傳の末娘)、左端に立っているのが太田常利(太田家に養子に行ったわか(の次男)、万里夫人の真後ろが石川浩さんのご母・まさ(わか(の長男・稲雄の一人娘)、万里夫人の右はわか(の夫・良助、良助の後ろで赤ちゃんを抱っこしているのが新渡戸訓(わか(の三男で、前館長の父)、良助の真後ろが訓の妻・トヨ。そのほか写真には三本木新渡戸家親戚が写っている



発見!! 石川浩さん所蔵アルバムから 三本木新渡戸邸での新渡戸万里夫人記念写真

昆虫学者・新渡戸稲雄(新渡戸稲造のいとこ)の孫・石川浩さん(三沢市)から、企画展『三本木原開拓 虫図鑑～人と虫のかかわりの歴史～』に貴重な写真を複製提供いただきました。その折、石川さん所蔵のアルバムの中に、新渡戸稲造博士夫人の新渡戸万里夫と、夫妻の友人アンナ・C・ハーツホーン女史の三本木新渡戸邸での記念写真を発見しました。

三本木での新渡戸万里夫人の思い出

写真左側で新渡戸わか(新渡戸傳の末娘)の膝に座っている米澤洋子さん(太田常利の長女、七戸町在住)に、写真について伺いました。

「兄の襄二(前列右から3人目)が、足をすりむいて家のそばの井戸端に腰掛けていたら、太素塚のお墓の方から万里夫人とハーツホーンさんが歩いて来て、すりむいた足を見てしきりに英語で“かわいそう”というようなことを言って、メンソレータムか何かを塗ってくれたそうです。薬を塗る手が真っ白くふわふわとマシュマロのようで、強い香水の匂いに驚いたと話していました。父(太田常利)は英語が達者だったので、万里お婆さんは新渡戸家ではなく太田家に泊まりました。上の兄・隆三(写真で洋子さんの前に立つ男の子)の話では、万里お婆さんが来るというので、急ぎょ大工さんが日本式のトイレを洋式に作り変えていて、“外国人はこんな風にしなればだめなのか、不思議だなあ”と思ったそうです。それでトイレが出来上がると、なんども見に行くと話していました。万里お婆さんは日本語が話せなかったようで、ハーツホーンさんのほうが流暢な日本語で色々話しかけてくれたそうですが、残念ながら内容は覚えていないと言っていました。万里夫人を迎えるために、布団を畳んでベッドのようにしつらえたり、映画で見ると陶器の水差しとタライを準備したりしていたようです。」

万里夫人に同行したハーツホーン女史は、津田塾大学の設立にあたって津田梅子を助けた人物として知られています。新渡戸稲造夫妻とのかかわりは深く、稲造の名著「BUSHIDO」は、稲造の口述をハーツホーン女史が書き取ったものが原型となっています。

米澤さんご兄妹からは、三本木での新渡戸万里夫人の思い出を伺うことができましたが、この写真の撮影当時を知る方は少なくなっています。写っている方々の年齢等から推測して、昭和2～3年(1927～8)の撮影と思われるのですが、詳しいことは現在調査中です。



▲万里夫人の思い出を語ってくださった米澤洋子さん

画家・八重樫光行さん

新渡戸稲造の英訳俳句の版画を寄贈

芭蕉の句「夏草や つわものどもが 夢の跡」の新渡戸稲造の英訳をモチーフとした版画を、画家・八重樫光行さん(盛岡市)から寄贈いただきました。

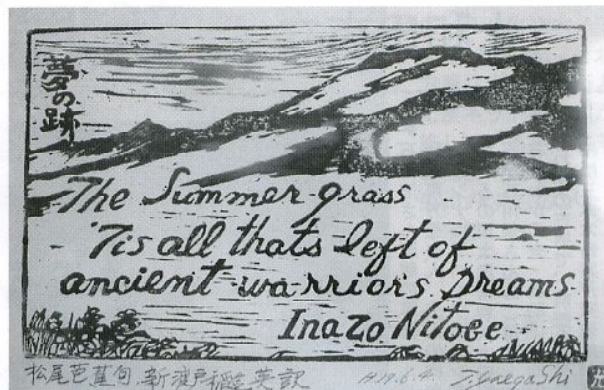
八重樫光行さんは、平成17年に六戸町から出版された「奥入瀬川絵地図」をはじめ、地域の歴史や文化を盛り込んだ絵地図を多数作成しています。今回寄贈いただいた版画は、昨年完成した「平泉絵地図」の作成にあたり、八重樫さんが平泉・毛越寺を見学していたところ、境内にある新渡戸稲造の英訳石碑を見て感激し、作成したものとのことです。

八重樫さんによれば、今年北上市で開催した画業25年展でこの版画を展示したところ、新渡戸稲造が「夏草や～」の俳句を英訳していることや、その石碑が毛越寺にあることを知っている方が少ないものの、反響が大きかったので、当館への寄贈を思い立たれたとのこと。



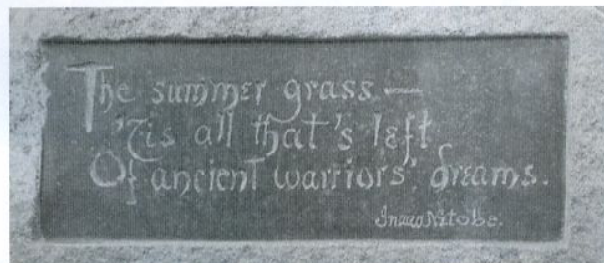
◀八重樫光行さん

平成3年第43回三軌展出品作品《儀装された地Ⅰ》会友優秀賞受賞。三軌会会員ならびに評議員。自然環境論文で岩手日報賞受賞。郷土史家として、岩手日日新聞社に新渡戸氏が南部藩に仕えるまでを書いた歴史短編小説「翡翠色の目～新渡戸家の危機～」などを、絵と文ともに連載



▲新渡戸稲造による「夏草や～」の英訳をモチーフとした八重樫光行さん制作の版画

平泉において藤原秀衡の庇護を受けた源義経は、高館(中尊寺東南の丘陵)に住んでいましたが、文治5年(1189)源頼朝の圧力にたえかねた藤原泰衡に攻められ自刃した。元禄2年(1689)旧暦5月、高館を訪れた芭蕉は義経主従をしのび「夏草や つわものどもが 夢の跡」の句を詠んでいる。八重樫さんは、句の歴史的な背景を表すために、義経が住んだ高館から見える東福山と北上川をバックに、手前には夏草を配置している



▲毛越寺境内にある新渡戸稲造の英訳句碑

この碑のもととなった書は昭和6年(1931)新渡戸稲造が岩手に来た折、衆議院議員・棚瀬軍之佐に書き贈ったもの。また、毛越寺にはこの碑とともに、明和6年(1769)に高館から移した芭蕉真筆の句碑などがある

博物館実習生レポート

—10日間の実習を終えて—

津軽出身の私がなぜ新渡戸記念館での実習を志望したかということ、以前見学した際、新渡戸家の偉業を熱心に普及しているところにとっても魅力を感じたからです。

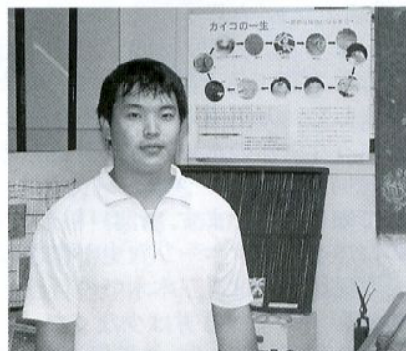
私が今回の実習で一番学んだことは、体調管理の大切さです。風邪を実習前に治すことができず、実習期間の半分も休んでしまいました。体調管理をしっかりすることが、全ての基本であると学びました。次に清掃・あいさつの大切さです。毎朝館外の清掃をすることから始まりましたが、徐々にきれいになっていく太素塚境内を見ていくのが楽しかったです。また太素塚にはたくさんの市民が訪れ、掃除をしていると、あいさつをしてくれま

す。それはとても気持ちがいいものです。清掃とあいさつ、一見地味に見えるかもしれませんが、来館して下さったお客様に気持ちよく見学していただくために最も重要なことだと感じました。

最後にになりましたが、館長さんをはじめとする職員のみなさん、ご指導いただきありがとうございました。

平成18年度第1期の博物館実習では企画展の展示補足資料として蚕の生態を紹介するパネル「カイコの一生」を課題として作成してもらいました。

弘前学院大学文学部4年生 竹浪大輔



◀課題で作成したパネルと竹浪大輔さん



稲生川疏水百選記念・上水148年記念企画展

三本木原開拓 虫図鑑

平成18年8月1日(火)～9月30日(土)

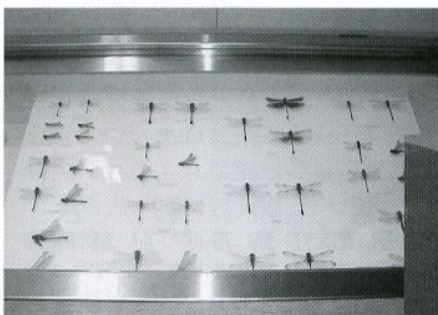
開催にあたっては青森県立郷土館、十和田市郷土館はじめ各方面から多数の資料をお借りするとともに、県立郷土館・山内智学芸主幹からご指導いただきました。また、展示紹介記事を東奥日報に8月15日(火)から7回連載で掲載いただきました。

三本木原開拓と虫のかかわり

幕末に新渡戸傳とその息子・十次郎の指揮のもと行われた三本木原開拓は、稲生川の上水と開田にとどまらない地域の総合開発でした。産業開発も積極的に行われ、その一つとして、養蚕の興業が試みられています。今回は文久元年～3年(1861～63)に開拓事務所で記録していた『養蚕日誌』や享和2年(1802)出版の『養蚕秘録』をはじめとする所蔵資料のほか、十和田市郷土館から蚕業の民具をお借りし、当地の養蚕の歴史を紹介しました。また、開拓時代、この地域で「虫送り」が行われていた記録などを紹介するとともに、害虫防除専門書『除蝗録』[文政9年(1826)]や『農業餘話抄』[文政11年(1828)]など農業技術書の展示を通して、先人たちが苦勞した害虫との闘いについても紹介しました。

虫あそび 今昔

「虫あそび 今昔」と題して、江戸時代と現代の虫遊びを紹介しました。その中で、江戸時代の人々が虫に科学的な目を向けていたことを示す資料として、当館所蔵の希少な昆虫図譜『蟲譜図説』[安政3年(1856)]を初めて展示しました。また、館長代理と親交のあるトンボ愛好家・林茂さん(横須賀市)から、西表島のイリオモテヤンマや沖縄のカラスヤンマ、体長が3センチほどしかないハッチョウトンボなど、珍しいトンボの標本74点(34種)を寄贈いただき、展示しました。



◀展示したトンボの標本



標本を寄贈いただいた▶林茂さん



◀展示室には虫の鳴き声を流し、耳でも虫を感じてもらった。また、オオクワガタの生態展示やトンボのDVD鑑賞コーナーも好評だった

郷土ゆかりの昆虫学者2人

新渡戸稲造のいここにあたる昆虫学者・新渡戸稲雄と、十和田湖を全国に知らしめた文豪・大町桂月の次男である農学博士・大町文衛の2人を「郷土ゆかりの昆虫学者」として紹介しました。展示にあたって、新渡戸稲雄の孫の石川浩さん(三沢市)から、稲雄の旧蔵書『日本百科大辞典』[明治41年(1908)三省堂]6冊を寄贈いただきました。また、県立郷土館から稲雄ゆかりの昆虫として、「ニトベギングチ」と「ムラサキイラガ(旧名・ニトベイラガ)」の標本を、大町文衛博士の孫・高橋晋太郎さん(仙台市)からは、博士の写真や『日本昆虫記』[昭和16年(1941)朝日新聞社]などの著書をお借りし、展示することができました。

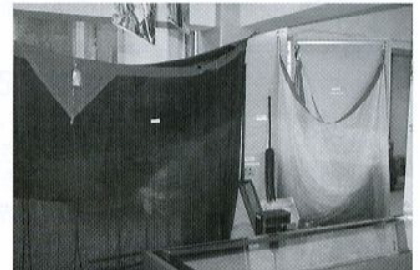


◀石川浩さんと奥様の類子さん。新渡戸稲雄を紹介するコーナーの前で

虫よけの民具の展示

大正時代から昭和40年ごろまで使用されていた害虫防除の民具を県立郷土館ならびに市郷土館からお借りして展示しました。中でも市郷土館からお借りした蚊帳を展示室内に張ったところ、蚊帳を知る人には懐かしく、蚊帳を知らない世代にも「涼しげだ」と好評で、昔の暮らしを見直す声が聞かれました。

蚊帳のほか、ハエ取り▶ピン(県立郷土館蔵)やゼンマイ仕掛けのハエ取り器「ハイトリック」(市郷土館蔵)などを展示



関 連 情 報

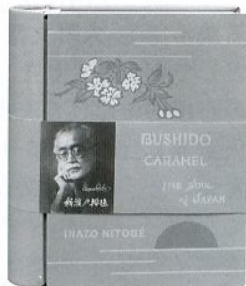
◆太素塚清掃奉仕

7月2日(日)・8月6日(日)・9月3日(日)・9月20日(水) ※予定
本瀬戸山老成会様 ありがとうございます

◆“BUSHIDOキャラメル”登場

新渡戸稲造の子供好きは有名ですが、近所の子供たちは、会うといつもキャラメルをくれる稲造を“キャラメルおじさん”と呼んでいたそうです。そうした稲造の人柄にちなんだお土産品「BUSHIDOキャラメル」を、株式会社小六(札幌市)が製作しました。「BUSHIDO」初版本をモチーフとした缶の箱もユニークで、キャラメルといっしょに新渡戸稲造の業績をまとめた豆本が入っています。「BUSHIDOキャラメル」は、記念館でお買いもとめいただけます。

手のひらサイズの缶の箱は▶
キャラメルを食べた後も記
念に残すことができる
「BUSHIDOキャラメル」
(税込630円)



◆宝島社「シリーズ偉大な日本人・新渡戸稲造」発行

先月、宝島社より『シリーズ偉大な日本人・新渡戸稲造—「武士道」と日本人の美しい心—』が出版され、当館も資料提供などで協力しました。本書の第一章は新渡戸稲造の生涯を10のエピソードでたどる“新渡戸稲造「10大伝説」”、第二章は名著「BUSHIDO」を紹介した“「武士道」17の教え”、第三章“新渡戸稲造「金言集」ダイジェスト”など、新渡戸稲造の生涯と思想がこの一冊で分かる構成になっています。また、第四章で“十和田市立新渡戸記念館を訪ねる～「新渡戸家」と「武士道」のルーツ～”と題して当館が詳しく紹介されています。



「シリーズ偉大な日本人・新渡戸稲造」表紙▶

◆7月1日(土)～9月30日(土)の来館小学校

<十和田市>奥入瀬小学校<八戸市>小中野小学校・高館小学校・城下小学校・下長小学校・中居林小学校・八戸小学校・町畑小学校<六戸町>折茂小学校<七戸町>七戸小学校<おいらせ町>木ノ下小学校<野辺地町>馬門小学校



◀おいらせ町立木ノ下小学校118名は、上北地方農林水産事務所と水士里ネット稲生川が実施している小学生対象の稲生川見学事業“稲生川みずものがたり”で来館した

◆辰巳琢郎さんが来館

9月3日(日)「東北青年フォーラム in 十和田」(主催：社団法人日本青年会議所)での講演のため来十した、館長代理と親交のある俳優の辰巳琢郎さんが来館されました。



新渡戸館長と▶

活 動 報 告

◆稲生川疏水百選・上水148年記念企画展「三本木原開拓 虫図鑑～人と虫のかかわりの歴史～」を開催

(詳細3面)

◆中高生の職場体験研修受け入れ

7月4日(火)～7日(金)三本木中学校の職場体験学習「三中トライやるウィーク」で、8月29日(火)～31日(木)三沢商業高校の職場体験インターンシップで、それぞれ1名を受け入れました。

▶三中トライやる
2年生 中村有紗さん



▶三沢商業高校
インターンシップ
2年生 高谷拓磨さん



◆平成18年度第1期博物館実習生受け入れ(詳細2面)



太素塚さんぽ

太素塚に咲くヤブカンゾウの鮮やかな橙色につられて、キアゲハがひとやすみ。
[8月26日(土)太素塚で撮影]

※訂正：前号で掲載したクマガイソウの寄贈者は「大坂義孝さん」でした。

〈編集後記〉

4月1日に館長代理に就任してから、初めての企画展開催ならびに、記念館だよりの発行ができました。もともと音楽が専門の私ですが、今後は新渡戸記念館についてさらに深く学び、尽くしてまいります。市民の皆様に暖かく見守っていただきたいと思ひます。(館長代理 新渡戸常憲)

発 行 太 素 顕 彰 会
 十 和 田 市 立 新 渡 戸 記 念 館
 ☎034-0031 青森県十和田市東三番町24-1
 TEL (FAX) 0176-23-4430
 E-mail:nitobemm@hi-net.ne.jp
 http://www.towada.or.jp/nitobe/
 印 刷 株式会社 岩 間 印 刷